

シイタケ・ナメコの

栽培実態調査結果について

昨年、各地方事務所のご協力をいただいて実施した、シイタケ・ナメコの栽培実態調査の結果を取りまとめたので、お知らせします。

なお、この調査は、県で毎年実施している特用林産物需給動態調査の昭和56年度調査結果をもとにして、シイタケについては保育ほだ木本数3,000本以上、オガクズナメコについては、栽培容器がビン・袋で年間の使用延本数 3,000 本(袋)以上、魚箱・コンテナで 500 箱以上、原木ナメコの場合は保育ほだ木本数5,000 本以上の規模の生産者を対象としたが、動態調査で取り上げられなかった細部について実施したものである。

1. シイタケ栽培について

1) 生産者数・生産量

ア. 乾シイタケ

生産者数は596人で、乾シイタケ総生産者数の約22%に当たり、乾シイタケ総生産量の約62% (89.4t)の生産をあげている。

地方事務所別では、生産者数・生産量とも下伊那が群を抜いて多く、生産者数で86%、生産量は66%を占めている。下伊那に次いでは本曾・長野松筑の順で、生産量は全体の9~7%ぐらいとなっている。

栽培型別の生産状況をみると、春期栽培型の生産者数が約74%を占め、総生産量の約70%に当たる生産をあげて、本県の乾シイタケ生産の柱となっている。

春・秋栽培型の生産者数は約24%で、総生産量の28%に当たる生産をあげている。

秋期栽培型の生産者は極めて少なく、木曾・長野地方事務所管内に9名を数えるだけで、生産量も全体の2%にとどまっている。

秋期発生の乾シイタケは品質的に劣ることから、現在の生産が春期中心となってきていることがうかがえる。

イ. 生シイタケ

生産者数は645人で、生シイタケ総生産者数の約18%に当たり、生シイタケ総生産量の約76% (971t)の生産をあげている。

地方地務所別管内の生産状況は、松筑が最も多

く全体の約17%、次いで長野15%、下伊那・諏訪各11%の順となり、他は何れも10%未満の生産量で、特に下水内・南佐久・下高井・埴科・木曾は1~2%と少ない。

栽培型別の構成をみると、生産者の割合は夏~秋栽培型37%、冬~春栽培型32%、周年栽培型31%と大体3等分された形となっており、季節的な生産者が69%を占めていることから、生シイタケ栽培を農林家の複合経営における品目として、有効に活用している点が見える。

栽培型別生産量の割合は、周年栽培型が約50%の生産をあげて最も多く、夏~秋栽培型31%、冬~春栽培型19%の順となっている。この栽培型別で特に注意したいタイプは冬~春栽培型で、厳寒期の栽培であるため施設費、暖房費が多くかかり栽培日数も多く要するうえに、ほだ木も傷み易いなど問題点も多いので、この栽培型の多い長野・松筑・北佐久・上伊那各地方事務所では、特に品種の選択、施設・暖房方法の改善、きのこ採取後のほだ木管理などの指導を強化する必要がある。

2) 原木の伐採時期

乾シイタケ栽培では、秋期伐採の原木使用率が59%、生シイタケ栽培では41%で乾シイタケ栽培の方が適期伐採原木を使用している割合が多い。全般的には秋期伐採が50%に達しようとしている段階で、これからも原木の適期伐採指導を続ける必要があり、特に秋期伐採原木の使用率が低い諏訪・上高井・上伊那・松筑の4地方事務所管内は、指導の強化が望まれる。

3) 植菌時期

乾シイタケ栽培では98%、生シイタケ栽培では91%と大部分が春期に植菌されている。原木の伐採後の管理と植菌時期について、昭和57年度の業務報告に詳述されているので熟読されたい。

4) 使用されている種菌

ア. 乾シイタケ

6種菌会社、18品種とその他不明のものが若干使用されているが、生シイタケ栽培に比べると整然としており、あまり問題点は見当たらない。

種菌会社別では森産業の種菌が最も多く、使用種菌量の約79%を占め、次いで明治7%、菌興5%の順となっている。品種別では森121号(低温

性)が57%, 森 465号(中高温性)・森W₄(中高温性)各6%, 明治 908(低温性)5%の順となっている。

地方事務所別の使用状況のうち、上高井においては春期発生に低温性種菌を全く使用していないことになっているので、使用種菌について検討が必要であろう。

イ. 生シイタケ

16種菌会社, 44品種とその他不明のものを加えると50品種に及ぶ。

メーカー別では森産業が全体の62%を占め、次いで秋山9%, 菌興8%, 河村3%の順で、その他メーカーの種菌は僅かな量である。

系統別では高温性種菌(高中・中高温性を含む)が71%と圧倒的に多く、中温性14%, 低温性7%, (その他不明8%)の順となっている。

低温性品種を使用すべき冬～春の栽培でも、多くの高温性品種が使用されており、特に長野・北佐久・松筑管内に多い。

5) 人工ほだ場におけるほだ木の養成状況

乾シイタケ栽培にあっては、ほとんどが自然ほだ場でほだ木養成が行われているが、北佐久・長野地方事務所管内では、人工ほだ場でほだ木養成を行っている者が一部ある。

生シイタケ栽培では、約24%の者が人工ほだ場でほだ木養成を行っている。地方事務所別では、南安曇・下伊那・下高井・北佐久管内に多い。

初年ほだ木の養成は、つとめて新しい天然ほだ場で行うことがよいので、この方向での指導が望まれる。

2. ナメコ栽培について

〔オガクズナメコ〕

1) 生産者数・生産量

今回の調査結果をみると、下伊那を除く14地方事務所管内で、928人の生産者によって約1,780tのオガクズナメコが生産されている。この生産量は、県内のオガクズナメコ総生産量の約83%に当たる。

主な産地は、下水内・下高井・上伊那・上小の4地方事務所管内で、この4地域の生産量を合わせると、全体の82%に達する。

栽培型別の生産状況をみると、周年栽培型の生産者による生産量が最も多く、全体の約42%に当

たる741tとなっており、オガクズナメコ栽培の主柱となっている。この栽培型の多い地域は、下高井・下水内・上小の3地方事務所管内である。

抑制栽培型による生産は、477人の生産者によって全体の約26%の生産量をあげている。

主な産地は上伊那地方事務所管内で、同栽培型の生産量の約80%をあげている。

自然栽培型による生産は、356人の生産者によって全体の約17%に当たる300tを生産している。

主な生産地は、上小・下高井・下水内・南佐久・長野の5地方事務所管内である。

短期栽培型による生産は、43人の生産者によって全体の約15%に当たる281tをあげている。

この栽培型による主な産地は下水内地方事務所管内で、同栽培型による生産量の約82%を生産している。

以上4つの栽培型のうち、周年栽培を除く3つの栽培型の生産者数は876人で、今回の調査対象総数の94%に当たり、生シイタケの場合と同様農林家の複合経営の重要品目となっていることがうかがえる。

2) 使用されている種菌

15種菌会社の27品種とその他不明の種菌が若干使用されているが、内容的には北研産業77%宮原8%と2社で約85%を占め、他の種菌会社の品種は僅かで、多いものでも2%前後の使用率となっている。

つぎに、品種別に使用率の高いものをあげると、北研N 105号(38%), 北研N 455号(27%), 北研N 325号(11%), 宮原S 120(7%)などである。

栽培型別の種菌の使用状況をみると、周年栽培型と短期栽培型では極早生系統(極早生・超早生を含む)が主として使用されており、周年栽培は短期栽培の繰り返し方式が主となっていることが推測できる。

抑制栽培型は晩生系統(晩2生を含む)の品種が主体となっている。

自然栽培型の場合は早生系統が約52%, 晩生系統35%, 中生系統6%, 不明7%の使用比率となっている。

3) 栽培容器の種類

最も多く使用されている栽培容器は、培地重量

が1kg未満のP.P袋で、生産量の約31%がこれで生産されている。

次いで、1500cc切捨てP.Pビンが約23%、750cc切捨てP.Pビン・750cc組立P.Pビン・魚箱が各9%、800cc広口P.Pビン8%、の順となっている。

これを栽培型別にみると、周年栽培型では1kg未満のP.P袋が約46%、800cc広口P.Pビン18%、750cc組立・切捨てP.Pビン各14%の順となっており、価格の安いP.P袋や、何度も使用できる広口や組立のものが多く用いられており、資材費の節減に配慮していることがうかがえる。

抑制栽培型では1,500cc切捨てビンが約87%を占めており、上伊那方式の生産が主流をなしている。

自然栽培型では依然として魚箱（コンテナ）が約49%を占めて最も多く、次いで、1kg未満のP.P袋が約40%となっている。

短期栽培型の場合は1kg未満の袋培地が約49%で最も多く、次いで、800cc広口P.Pビンが20%、750cc切捨て、750cc組立P.Pビンが各15%の順となっている。

以上のように、抑制栽培を除く3つの栽培型で、1kg未満のP.P袋と広口や組立式のP.Pビンが多く使用されていることから、これらの栽培技術等について検討する必要がある。

4) 施設の状況

今回の調査では、殺菌施設・接種施設・培養施設・発生施設・包装機について実施したが、まず殺菌施設についてみると、高圧55%、常圧45%でやや高圧が多くなっており、所有別では個人所有が76%となっている。

接種施設は無菌的構造のものが約13%と少なく、大部分が普通施設を使用して接種されており、害菌防除に関する指導を徹底することが必要であろう。なお、この施設も個人所有が80%を占めている。

培養施設については、大部分（94%）が室内培養方式の施設で、この場合も個人所有が91%を占めている。

発生施設は施設総数898棟で、冷暖房施設を備えているものが7%、暖房施設を備えたものが54%、その他39%の内訳となっている。これも個人

所有が97%となっている。

包装機は、928人の調査対象者で個人所有709台、共同所有12台が使用されており、大部分の生産者が色装機を使用していることが分かった。

栽培型別の特徴としては、全般的に個人施設の使用が多いなかで、抑制栽培型においては殺菌・接種の両施設は共同利用が主となっている。また、包装機は自然・短期の両栽培埋において、使用していない人が多い傾向が認められる。

〔原木ナメコ〕

今回の調査対象とした5,000本以上（保有ほだ木数）の規模の生産者による生産量は、原木ナメコ総生産量（107.8t）の約21%と少なく、大部分が小規模の生産によって生産されていることが分かった。

原木の伐採は冬～春にかけて大部分が行われ、植菌は春期に約98%実施されている。

使用されている種菌は、種菌会社別では森産業約74%、北研産業10%、秋山7%、その他9%となっている。品種別にみると森1号（晩生系統）53%、森3号（早生系統）19%、北研N455号（晩生系統）9%の順となっている。

〔ナメコの仕向先〕

オガクズナメコは99.5%、原木ナメコは91%とほとんどが生食用となっている。

（経営部 篠原）

—用語解説—

P.Pビン：P.Pビンはポリプロピレンの略称で、ポリエチレンにプロピレンを重合させるとポリエチレンより透明で、折り曲げに強くなり、きのこのオガクズ栽培用ビンの材料に使用されている。

表一 乾シイタケ栽培実態調査結果

(調査 57.10.末)

栽培型	生産者		生産量		主な生産地域 (所轄地方事務所)	主な使用種菌
	生産者	割合	生産量	割合		
春期発生型	441人	74%	62,285kg	70%	下伊那(71%)木曾(9%)北佐久(6%)	森121号(66%)明治908号(6%) 秋山A-6号(5%)
秋期 "	9	2	2,130	2	木曾(96%)長野(4%)	森252号(73%)森-W4号(13%)
春・秋 "	146	24	25,010	28	下伊那(60%)長野(18%)松筑(14%)	森121号(43%)森465号(18%) 森W4号(8%)
計	596	100	89,425	100		
県総数量に対する割合	2,712	22	144,700	62		

表二 生シイタケ栽培実態調査結果

(調査 57.10.末)

栽培型	生産者		生産量		主な生産地域 (所轄地方事務所)	主な使用種菌
	生産者	割合	生産量	割合		
夏～秋	239人	37%	303,460kg	31%	下伊那(26%)松筑(21%)南安曇(10%)	森W4号(25%)森465号(20%) 菌興514号(5%)
冬～春	205	32	180,830	19	長野(34%)松筑(33%)北佐久(13%)	森465号(25%)菌興241号(18%) 森252号(13%)
周年	201	31	486,860	50	諏訪(22%)長野(13%)上伊那(10%)	森465号(31%)森W4号(18%) 森252号(7%)
計	645	100	971,150	100		
県総数量に対する割合	3,589	18	1,275,800	76		

表三 オガクズナメコ栽培実態調査結果

栽培型	生産者		生産量		主な生産地域 (所轄地方事務所)	主な使用種菌	主として使用されている栽培容器の種類	施設の状況					
	生産者	割合	生産量	割合				高圧殺菌		無菌的接種		包装機	
								個人	共同	個人	共同	個人	共同
周年栽培型	52人	6%	741,200kg	42%	下高井(35%) 下水内(31%) 上小(15%)	北研N105号(45%) 北研N325号(25%) 宮原120(12%)	P.P袋(1kg未満)(46%) 800ccP.Pビン(広口)(18%) 750ccP.Pビン(組立て)(14%)	基 20	基 4	棟 9	棟 4	台 39	台 7
抑制栽培型	477	51	457,200	26	上伊那(80%) 下高井(7%) 長野(6%)	北研N455号(84%) 日農晩生(8%) 宮原(3%)	1,500ccP.Pビン(切捨て)(87%)	-	5	1	24	450	4
自然栽培型	356	38	300,200	17	上小(32%) 下高井(30%) 下水内(13%)	北研N105号(42%) 北研N455号(33%) 宮原120(5%)	魚箱(コンテナ)(49%) P.P袋(1kg未満)(40%)	139	14	13	13	202	1
短期栽培型	43	5	280,900	15	下水内(82%) 長野(13%) 埴科(4%)	北研N105号(78%) 松原(9%) 宮原120(8%)	P.P袋(1kg未満)(49%) 800ccP.Pビン(広口)(20%) 750ccP.Pビン(切捨て,組立て)(各15%)	6	4	9	-	18	-
計	928	100	1,779,500	100				165	27	32	41	709	12
県総数量に対する割合	2,129	44	2,156,100	83									